

4. 十勝に「氷河」があったころ

「氷河（氷の川）」があった日高山脈

環境

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



5月、日高山脈のベテガリ岳に残る雪。氷期には、真夏でも雪が残り、くぼんだところ(カール)には、一年中「氷河」が光っていた。

忠類でナウマンゾウが死んだ12万年前ころは、温暖な気候でした。(p50~51)

しかし、8万年前ころから地球はだんだんと寒くなり、「氷期」という時期が1万年前ころまで続きます。

氷期はそれまでに何回もあったのですが、これが最も最近の、つまり、今のところいちばん最後の氷期なので「最終氷期」と呼ばれています。

中でも、およそ2万年前にはぐっと冷えこみました。最も寒い時の気温は、年平均で、今より6~9 低かったと考えられています。

最終氷期には、日高山脈に「氷河」が青くかがやいていました。(昔の気温変化のグラフ p62)



今も氷河があるスイスのアルプス。氷河はゆっくり流れ下りながら、山はだをけずり取っていく。8月のようす。(写真:藤山広武氏)

夏でも残る氷河

今では、夏になると、ほとんどの雪が日高山脈から消えさります。しかし、最終氷期には、南部で標高1,000~1,300m、中部で1,300~1,600mより上の雪は残り続けていました。

この積もった雪が、自分の重さで固められ、巨大な氷となります。そして、その氷の固まりがゆっくりと斜面を下るのが「氷河(氷の川)」なのです。

氷河は一年中、日高山脈にありました(冬になって川がこおるのは氷河ではありません)。

氷河のつくり出した「カール地形」

氷河の氷ができる場所は、アイスクリームをスプーンですくったあのような、半円形の谷地形となります。

このような、氷河氷ができた山頂付近の谷を「カール」といいます。

日高山脈には、約100個のカールが東斜面と北斜面、つまり十勝側にあります。そのため、十勝平野からは見事なカールをいくつもながめることができます。

また、カールからゆっくりと流れ出した氷河は、山はだをけずります。けずられた砂やドロなどは川に流れこみ、川の水がにごります。氷河によってにごった川の水のことを「グレッシャーミルク(氷河のミルク)」とよびます。

今はとてもきれいな戸蔦別川や札内川も、氷河があったころには、グレッシャーミルクだったのかも知れません。



日高山脈のカール地形(十の沢カール)。「半円形の谷」になっている。エサオマントツタベツ岳付近から南を見たところ。(写真:佐々木雅修氏)

1 氷河期と氷期(ひょうがきとひょうき): 氷河期は、地球の気候が長い間寒冷化する期間で、南半球と北半球に氷床(ひょうしょう: 5万km²以上の氷河)がある時期を意味する。氷河期の中で、氷床が発達した寒い時期を氷期、氷床が小さくなった時期を間

氷期(かんびょうき)という。この定義によると、グリーンランドと南極に氷床がある現代も氷河期のうちであり、約1万年前までの氷期(最終氷期)が終わったあとの間氷期にあたる。忠類で見つかったナウマンゾウが生きていたのは間氷期で、今よりも暖か

いっ ほん やま てん ぼう

一本山展望タワーから見てみよう ... ペテガリ岳のカール地形

なか さつ ない むら しん さつ ない み なみ いっ ほん やま
 中札内村の新札内南に、一本山という小さな山があります。この頂上には展望タワーがあり、日高山脈から十勝平野までをぐるりと見わたすことができます。

ここでは、ちょうどペテガリ岳のカール地形をほぼ正面から見ることができます。

肉眼で見るには少し遠いので、双眼鏡などがあると便利です。

まだ、雪が残っている春の終わりには、ちょうどカールの底を雪がうめています(左ページ上写真)。そのような、かつて氷河があったころのイメージを伝えてくれます。



一本山展望タワーの位置。中札内村新札内南。



一本山展望タワー。

(上)一本山展望タワーから望遠鏡で見たペテガリ岳のカール。かつて、氷河の氷ができる場所だった。

第1章 十勝の平野や川ができるまで
 第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

もう少し細かいこと

氷河がつくる谷は「U字谷」

日高山脈には、水の流れてけずられた谷がたくさんあります。そうした谷は、谷底が細い流れでけずられてすどくなるため「V字谷」となります。

一方、カールから流れ出た氷河の場合、はば広い氷の固まりが谷をけずるため、谷底がゆるやかな「U字谷」となります。



水の流れがけずり取ると、すどいV字の谷となる。

氷期と亜氷期

氷期の中でも相対的に寒い時期があり、こうした時期を「亜氷期」といいます。

日高山脈で氷河が発達した亜氷期には、約8万年前から4万年前までの「ボロシリ亜氷期」と、およそ2万年前の「トッタベツ亜氷期」があります。

なお、日高山脈では、これら2つの亜氷期の前にも、大きな氷河があったあとが見つかっていて、この時期は「エサオマン氷期」と呼ばれています。

いくつかある氷期

最終氷期の前に、何回も氷期がありました。およそ20万～13万年前のリス氷期、約60万～40万年前のミンデル氷期、約90万～70万年前のギュンツ氷期などです。

これらの氷期と氷期の間の暖かい時期を「間氷期」といいます。私たちの生きる今も、次の氷期前の間氷期であろうといわれています。

氷河の時期と火山灰

日高山脈の氷河はカールから流れ出て、さらに下へのびていました(のびたところは「谷氷河」といいます)。

ボロシリ亜氷期の氷河が最ものびていたのは、支笏火山(今の支笏湖)から飛んで来た火山灰が降った直後の約4万年前だといえます。その後、氷河は後退したようです。

トッタベツ亜氷期では、ボロシリ亜氷期の時に比べて、谷氷河が小さなものだったようです。こちらの氷河の上には、約1万8千年前の恵庭岳の火山灰が降っていました。(火山灰 p58)

氷河を見ていた人がいた

少なくとも2万4千年前には、十勝に人が暮らしていました。ということは、日高山脈にかがやく氷河を見ていた人がいたこととなります。(旧石器時代 p72)

こうした人たちは、当時陸続きであったシベリアから、寒さをのがれて北海道へわたってきたようです。(p73)

かいころだった。ただし一般的に、氷期のことを氷河期ということがよくある。
 2 約100個のカール(やく100この...):何をカールとするか、どこまでを1つのカールとするかといった、カールの定義が人によって異なるため、日高山脈のカール数につ

いては、様々な説がある。
 3 グレッシュャーミルク:今も氷河のある、ヨーロッパのアルプスから流れる川などで、見ることができる。